

# 漢籍引用より見た徒然草の一考察

## 無常観及び矛盾性

二十六回生 下村久美子

### 目次

まえがき

第一章 無常観

第一節 無常観の段における漢籍引用

1. 文集・文選

2. 老荘・儒家

第二節 無常観の区分と表現形式

第二章 矛盾性

結び

注

参考文献

資料編

まえがき

徒然草に数多くの漢籍引用があることは、既に周知のとおりである。そして、その漢籍引用の性格を明らかにすること、徒然草の内面を探る一つの手段であると考える。

しかし、この方面からの研究は、これまで福田襄之介氏・本学の古澤未知男先生に説がある他は余り見かけないものである。そこで、私は右両氏の論を参考に、主として漢籍引用の面から徒然草の一考察を試みたいと思う。

論を進めるにあたっては、二つの観点を置いた。一つは、徒然草の根底を流れる思想である無常観、それを主題とした段中における漢籍の影響を通して、兼好の無常観の一面を明らかにすること。いま一つは、徒然草においてよく論じられる矛盾性の問題を取り上げ、それが漢籍引用の面でのどのように表われているかを考えてみることである。

尚、本稿における徒然草の段数・本文引用はすべて、日本古典文学大系「方丈記・徒然草」に拠った。

### 第一章 無常観

第一節 無常観の段における漢籍引用

徒然草の根底を流れる思想が、無常観であるということ、改めて言うまでもない。しかし、すべての段にはつき

橋純一氏(注)、安良岡康作氏(注)、西尾実氏(注)の見解を参考にしながら、私なりに無常観を主題として書き記している段・一部に無常観を表わした所がある段を選び出してみると次のようである。

七・十・十九・二十五・二十六・二十七・二十九・三十・三十八・四十一・四十九・五十八・五十九・七十四・七十五・九十一・九十二・九十三・百八・百十二・百三十四・百三十七・百五十五・百六十六・百八十八・百八十九・二百十七・二百二十・二百四十一

以上二十九の段は、その数において、序段を含めた全段数二百四十四段から見ると、せいぜい一割強にすぎない。ところが、そこにある漢籍引用は、三十四例挙げられ、全引用数(九十六例)の三割以上にあたる。元来仏教思想である無常観を述べた段に、これだけ多くの漢籍が引用されているということは、どういう意味を持つのであろうか。以下、この点について考察を進めていきたい。

まず、前記二十九の段における引用漢籍は、白氏文集8・文選5・莊子5・晋書3・淮南子2・寒山詩2・老子1・論語1・孟子1・書経1・易経1・小学1・和漢朗詠集1・事文類聚前集1・諸上善人詠1

の如くである。これで見ると、文集・文選といういわゆる文芸書が最も多く、次いで莊子・淮南子・老子などの老荘の書、続いて論語・孟子・書経・易経・小学などの儒家の書となっている。これら文芸の書・老荘の書・儒家の書は、元来それぞれ性格の異なる漢籍であるので、この三つのグループ別に引用の実態を見ていきたい。

りとその思想が書き表わされているわけではない。そこで、

#### 1 文集・文選

文集・文選の引用は、次の段にある。

七(文集1)・二十五(文集1)・三十(文集1・文選2)・三十八(文集2・文選3)・四十一(文集1)・百三十七(文集1)・百八十八(文集1)

この中には、第三十段にある、

いづれの人と名をだに知らず、年々の春の草のみぞ(古墓何代人 不知姓与名 化作路傍土 年年春草生)

の箇所の文集の引用や、

嵐にむせびし松も千年をまたで新にくだかれ、古き墳はすかれて田となりぬ。(古墓犁為田 松柏推為新)

という箇所の文選の引用のように、原典である文選の古詩十九首も無常を述べたものであり、本文においても無常を表わす恰好の例となっている引用例がある。が、このように、内容的にも無常観とかかわっているものは一部しかなく、ほとんどは、第七段の、

夕の陽に子孫を愛して：：ひたすら世をむさぼる(朝露貪名利 夕陽憂子孫)

という箇所の文集の引用のように、無常観とのかかわりを全く無視する訳にはいかないが、いずれかと言えば、「老い」という言葉を直接用いず、「夕の陽」と表現するような修辞的效果を狙った引用と言えるようである。

#### 2. 老荘・儒家

儒家の書の引用は、たとえば、第三十八段にある、  
大きな車、肥えたる馬、金玉の飾りも、心あらん人は、  
うたて愚かなりとぞ見るべき。(肥馬衣輕裘 揚揚過闕)

里 雖得市童憐 還為識者鄙

の箇所の小学の引用のように、内容的に深くかかわっているというよりも、適当な例や言いまわしとして断片的・修辭的に引用されているにすぎないと思われる。

それに対して、老荘の書の大部分の引用は、第七段にある、

かげろふの夕を待ち (蜉蝣朝生而暮死)

夏の蟬の春秋をしらぬ (蟬蛄不知春秋)

という箇所の淮南子・荘子の引用のように、無常を表現する常套語として用いられるなど、無常観との深いかわりを持って引用されている。

このことは、あるいは当然のことなのかもしれない。なぜなら、無常観は儒家よりもむしろ老荘と相通じる面を多く持つからである。また、兼好は出家し隠遁生活を送っているのであるから、無常や諸縁放下を説く場合、その拠所として老荘思想を持ち出してきても何ら不思議はない。

無常観という仏教思想を述べながら、兼好は仏典に拠るばかりでなく、老荘を初めとする漢籍の影響をも受けている。これは、兼好の持つ多様性の一つであると言えるかもしれない。また、彼の説く無常観が、仏者の立場からばかりでなく、人が多かれ少なかれ感じるであろう生活感情としての無常の認識であるという点からも、これらの漢籍の引用を捉えられるのではないかと考えるものである。

## 第二節 無常観の区分と表現形式

徒然草の無常観を捉える一つの見方として、西尾夷氏は、第三十段あたりまでの無常観は、世の無常を嘆いている感

傷的な無常観であり、第三十一段以後は、無常観が認識の問題・自覚の問題になつてきていることを指摘され、前者を詠嘆的無常観、後者を自覚的無常観と名づけておられる(注6)。また、安良岡康作氏は、西尾氏のこの見解を一つ(注7)の拠所として、第三十二段までとそれ以後とでおよそ十一年の成立年代の隔りがあると指摘しておられる(注8)。

これらのことから、無常観を二つに分けて考えた場合、そこに引用された漢籍の面からも何か注目すべき点を掴むことはできないのだろうか。

第一節で挙げた無常観の段を、西尾氏の観点で分けると、七・十・十九・二十五・二十六・二十七・二十九・三十の八つの段が詠嘆的無常観の段となり、その他の二十一の段が自覚的無常観の段となる。

それぞれの漢籍引用数を見ると、詠嘆的無常観の方は、八つの段中四段に十例、自覚的無常観の方は、二十一の段中九段に二十四例と、段や詞句数を比較した場合、さほどの差はないと言えるようである。

次に、その引用詞句の出典をみると、詠嘆的無常観の段では、

白氏文集3・文選2・荘子2・淮南子2・和漢朗詠集1であり、自覚的無常観の段では、

白氏文集5・文選3・荘子3・晋書3・寒山詩2・老子1・小学1・書経1・論語1・孟子1・事文類聚前集1・

諸上善人詠1

である。ここで気づくことは、詠嘆的無常観の段中には、和漢朗詠集の引用はあるものの、他はすべて文選・文選と

老荘の書であるのに対して、自覚的無常観の段になると、それらの他に儒家やその他の書の引用が入ってくることである。儒家の書については、第一節で見たように断片的・修辭的引用にすぎないが、たとえそうであっても、自覚的無常観の段になって初めて儒家の書までが引用されてくるということとは、一つの注意すべき点として挙げられるのではないかと考える。

また、文集・文選の引用については、桑原博史氏が、詠嘆的無常観における文集・文選の引用について、  
柔らかに情緒的に認識を深めさせるためには、漢詩文を引用しても「白氏文集」「文選」という中古的教養の書に拠ることになる。<sup>(注9)</sup>

という見解を出しておられる。確かに文集・文選の引用は、詠嘆的無常観の方、つまり、「はかなし」「悲し」と表現されるように哀感に満ちた目で無常の世を眺め、しかも、第七段に見られるような「ものあはれ」に視点を置く中古的伝統の流れを受け継いでいる無常観にあっては、断片的にせよ、内容的に深められているにせよ、引用される余地や効果が十分あったと思われる。

しかし、文集・文選は、無常を世の哲理として認識して述べている自覚的無常観の段にも引用されているのである。そして、その大部分は、第三十八段、第四十一段くらいまでに出尽している。第三十八段は、老荘の考え方が大きな比重を占めており、第四十一段は、時として感じる生活感情としての無常観の色彩が強い。いずれも、詠嘆的ではなくなつたにしろ、第四十九段以後でしばしば見られる、無

常の認識の上に立って仏道修行に努めよと説く態度とも異なっている。いわば、詠嘆的から自覚的に移る、過渡的な段であると言えるのかもしれない。そういう段にあっては、仏教的無常観を説く段よりも、文集・文選の引用される余地がまだあり、この点からこれらの引用を捉えることができるのではないかと考える。

次に、それぞれの無常観の表現の仕方を見ると、詠嘆的無常観を述べてある方は和文的な文章であり、自覚的無常観の方は漢文的な書きぶり、つまり、漢語、漢文訓読語を多用したり、対句、起承転結を用いた書き方がしてあることがわかる。このような表現面からも、ある程度まではつきりした差を認めることができると思われる。

## 第二章 矛盾性

徒然草については、これまでにも、内容的・思想的に多くの矛盾が指摘されている。そこで、この矛盾性の問題を、主に漢籍引用の面から探ってみたいと思う。

ところで、徒然草における引用詞句出典は、

論語 18 白氏文集 14 文選 9 莊子 6 晋書 5 書經 5  
老子 4 孟子 4 易經 3 礼記 3 史記 2 淮南子 2  
蒙求 2 寒山詩 2 小学 2 世說新語 2 揚子法言 2  
帝範 2 孔子家語 2 和漢朗詠集 2 三体詩 1 孫子 1  
漢書 1 事文類聚前集 1 諸上善人詠 1

である。これを見ると、論語を初めとして、書經・孟子・易經・礼記・蒙求・小学・揚子・法言・帝範・孔子家語などの儒家の書が、合計すると四十三例あり、全引用数の約

四十五%を占めている。次いで、文集・文選という文芸書が合わせて二十三例、約二十四%、続いて、莊子・老子・淮南子などの老荘の書が、合計十二例、約十三%という所である。

ここで問題となるのは、隱遁文学である徒然草に、老荘の書よりもむしろ儒家の書の引用の方が圧倒的多数を占めていることである。つまり、徒然草は、在俗出家ではあるものの法師と名のつく兼好が、隱遁生活を送りながら書いたものである。そういう隱遁生活を送る者にとつては、儒家という倫理道德を重んじる思想よりも、無為自然を説く老荘思想に共感する面が多いはずである。ところが、漢籍引用の面からは全く逆の結果となっている。これは、明らかに一つの矛盾と言える。しかも、それほど多く引かれていた儒家の書が、愛読書を述べた第十三段には、論語すら挙げられていない。このことは、いかに解すればよいのであろうか。

まず、儒家の書の引用例から具体的に見ていく事とする。儒家の書の引用は二十六の段にあるが、このうち儒家の思想に拠るといふよりも、言葉として適当であったために引用されたにすぎない断片的引用が幾つか挙げられる。たとえば、第二百三十八段にある、

紫の朱うばふことを悪む（悪紫之奪朱也）という箇所の論語の引用のように、兼好の自讃を述べるための一つの材料として、この部分が何巻のどこそこの辺にあると即座に申し上げることができたという、例として挙げられている。

全引用の約三分の一に当る。

次に、内容的にも儒家の思想と結びついていると思われる引用例としては、たとえば、第八十五段にある、

賢を見て羨む（見賢思齊焉・論語）

下愚の性移るべからず（唯上知与下愚不移・論語）

悪人の真似とて人を殺さば、悪人なり。（脩其惡則為惡人・揚子法言）

驥を學ぶは驥の類ひ（駟驥之馬亦驥之乗也・揚子法言）

舜を學ぶは舜の徒なり。（學舜為善者舜之徒也・孟子）

という五箇所の引用などが挙げられる。これらは、「偽りても賢を学ばんを、賢といふべし」という、この段の主題と密接に結びついていると思われる。これに類する儒家の引用としては十六例挙げられ、全引用の約三分の一である。

そして、残りの約三分の一の儒家の引用は、古澤未知男先生が、

儒家の書の中にも存外老荘仏家的要素が多く見られる。（注10）

と指摘しておられるような引用例として捉えることができ。たとえば、第二十一段には、

孔子も時にあはず。（君子博学深謀而不遇時者衆矣 何

獨丘哉・孔子家語）

顔回も不幸なりき。（有顔回者：不幸短命死矣・論語）

人は天地の靈なり。（惟天地萬物父母惟人 萬物之靈・書經）

と儒家の引用のみ三箇所あるが、内容的には、

其の事依此批釈むか分備えていざ思わねば是れも。

前後遠ければ塞がらず。：：寛大にして極まらざる時は  
喜怒これにさはらずして、物のためにわづらはず。  
と言うように、全く老荘思想に拠っていると云えるような  
引用である。

以上のように儒家の書の引用を見てみると、儒家の書は、  
引用数の上で優勢である割には、内容的影響力が乏しいとい  
うことになりはしないだろうか。

次に、老荘の書の引用例について検討してみたい。老荘  
の引用は七つの段に見られる。このうち、断片的引用は、  
わずか一例しかなく、他は内容的にも老荘思想に拠ってい  
ると思われる。たとえば、第九十七段は、

小人に財あり、君子に仁義あり（彼其所殉仁義也 則  
俗謂之君子 其所殉貨財也 則俗謂之小人）

という箇所は、君子が引用されているが、「仁義」という儒  
家の徳目を君子を損うものとして述べているあたり、老荘  
思想の強い影響を見ることができるとは、老荘の影響  
は、儒家の書の引用の所で見たように、単に引用例のある  
所のみには止まらず、儒家の引用箇所にも内容的に反映し  
ている例が少なくない。このように、老荘思想は徒然草の  
中であって、引用数以上に強い影響力を持っていると考え  
られるのである。

以上のことから、最初に述べた矛盾について考えてみる  
と、引用数からは確かに矛盾であるが、内容的には、決し  
て老荘が少数に甘んじているのではなく、むしろ儒家以上  
に強い影響を与えていると考えることができる。即ち、矛  
盾は矛盾として残るのではなく、徒然草は、隠遁文学とし

の老荘的要素をも十分備えていると思われる。そして、  
第十三段において、儒家の書は全く見られないということ  
も、このことから当然のことであつたのではなからうか。

## 結 び

以上、二つの観点を持って、漢籍引用の面から徒然草に  
ついて考察してきた。

まず、第一章第一節においては、無常観を主題とした段  
中には漢籍引用が比較的多く、それは兼好の生活感情とし  
ての無常の認識に拠るためではないかと考える。また、引  
用例を出典別に見ると、文集・文選が最も多く、次いで老  
荘の書、儒家の書と続いている。そして、内容的には、文  
集・文選の多くが修辭的・断片的引用であり、儒家も形式  
的引用であるのに対して、老荘の引用が最もよく内容とも  
結びついていられると思われる。それは、ある面では当然のこ  
とであり、出家し隠遁生活を送る兼好が、仏教思想である  
無常観を述べる場合にも、老荘を一つの拠所とすることに  
不思議はないと思われる。

第二節では、無常観を詠嘆的、自覚的と区分した場合の  
漢籍引用からの注目すべき点を挙げた。一つは、自覚的無  
常観の段になって初めて儒家の書までが引用されてくるこ  
と。いま一つは、文集・文選の引用は、詠嘆的無常観の方  
においてより効果的に引用され、自覚的無常観の方では第  
三十八段・第四十一段に集中的に引用されている他は余り  
見られないことである。また、それぞれの無常観の表現の  
仕方を見る時、詠嘆的無常観の段は和文的であり、自覚的

無常觀の段は漢文的な書きぶりがしてあると言えるのではないかと思われる。

第二章では、全段を通して見た場合、隱遁文学である徒然草に当然多かるべき老荘の引用が少なく、反対に儒家の引用が圧倒的多数を占めているという、矛盾について考えた。が、これは数の上だけのことであり、内容的にはむしろ老荘思想の方がより強い影響力を持っていると思われる。即ち、矛盾は矛盾として残るのではなく、徒然草は隱遁文学としての要素をも十分備えていると言うことができる。

注

(注1) 「徒然草に投影した海外文学」福田襄之介 「国文学」第六卷第三号

## 解釈と鑑賞

### 狭衣物語解釈

(14)

大殿には、<sup>おほいぬ</sup>「中將の君はこよひは出で給ふまじきにや」など、尋ねさせ給ふほどに、藏人所の方に人々こゑ高く

「漢籍引用より見た徒然草の一考察」古澤未知男

(注2) 「徒然草」日本古典全書、解説

(注3) 「徒然草全注釈下」、解説

(注4) 「方丈記・徒然草」日本古典文学大系、解説

(注5) 具体例については付載の資料編に詳しく挙げたが、本稿ではいっさい省略する。

(注6) (注4)に同じ

(注7) 「兼好の遁世生活とつれづれ草の成立」「方丈記

・徒然草」日本文学研究資料叢書 有精堂

(注8) 「徒然草の本質」「国文学」第十卷 第九号

(注9) 「無常觀の形式——徒然草における」「解釈と鑑賞」第四二卷第五号

(注10) 「漢籍引用より見た徒然草の一考察」

本 田 義 彦

もの言ふを、「何事ならむ」と聞かせ給ふに、伊豫守なにかしの朝臣参りて、「うちにかうかうの事なむ候ふな